

編集後記

ウイルスひとつでかくも簡単に日常は変わるものなのかと思い知らされる日々が続いている。政治・外交も社会も経済もウイルスに翻弄され、世界は急速に萎縮し断片化している。グローバリゼーションの顕著な現象が展開するなかで、国際協力——ウイルスという共通の敵に対する——と同時に主権の強化によってしかこの事態に対抗できないという皮肉を前に、人間の知恵が試されていると感じる。

日本研究はグローバリゼーションの波のなかに放り出されている。今回ご執筆いただいた10名の方々の論考は、多かれ少なかれその事実を物語るものとなった。人文学・社会科学に対する風当たりの強さは米国をはじめ多くの国で見られる現象であるし、国際社会における日本の経済的プレゼンスの相対的低下は、世界の日本に対する関心を低下させ、大学・研究機関での日本研究の維持を困難にしつつある。日本研究が人文学・社会科学の発展にどのように貢献するのか、そもそも「日本」がどこまで自明の存在なのかを問わなければならぬことを、あらためて痛感した。

末筆ながら、お忙しいなかを編集作業に快くご協力くださった執筆者の先生方、編集に際して貴重なご助言をいただいた松田利彦・海外研究交流室長、そして業務過多のなか丁寧な作業を進めてくださった出版編集係の皆様から感謝申し上げます。

楠 綾子